

1971
作品ナンバー0098

森林は生きている〔二部作〕

記録
35ミリ
カラー

■企画
林野庁
日本林業技術協会

スタッフ

■製作
蓑輪満夫
村山英治
■脚本・演出
村山正実

■撮影
村山和雄
■撮影助手
北川英雄
中井正義

■音楽
山内 忠

■野鳥効果
蒲谷鶴彦（日本野鳥
の会）

■解説
名古屋 章

第1部 森のおたち〔26分〕

第2部 森の生物たち〔24分〕

文部省選定

優秀映画会推薦

1971年教育映画祭最高賞

第27回東京都教育映画コンクール銀賞

〔指導〕

前林業試験場場長 坂口勝美

林業試験場造林第二研究室長 蜂谷欣二

〔協力〕

東京都立大学助教授 北沢右三

鹿児島大学助教授 田川日出夫

信州大学志賀自然教育園

日本野鳥の会

日本の国土の68パーセントを占める森林（1970年）。森林は、木材の提供だけでなく、国土の保全、水源の涵養、大気の浄化など、私たちの生活に果たしてくれる役割ははかりしれない。この映画は、複雑な生命のからみあった、自然の共同体である森林を支配している一連の自然の法則を明らかにし、森林に対する理解を深めるために製作された。



第1部「森のおたち」

森林はどのようにして生まれてきたか、まず森林の発生過程（遷移）を追ってみる。20数年前の噴火でできた桜島の溶岩台地を見ると、まだ植物は見られない。年月がたつと、はじめに地衣類、苔類が生え、それによってわずかな土壌ができると1年生草木が生えてくる。数十年たつと、一面のイタドリ群落となる。やがてクロマツやヤシヤブシなどの木本（もくほん）が侵入し陽樹林を作っていくと、イタドリやススキは次第に姿を消していく。しかも、その陽樹の下には陽樹は育たず、陰樹であるアラカン、タブなどの幼木が育ってくる。そして、タブ、シイ、カシの鬱蒼と茂る陰樹林となる。これが地球上暖帯の終極の森、極相林である。寒い地方では、シラカバの陽樹はオオシラビソの陰樹に変わっていく。

湖や沼からも森林ができる。尾瀬ヶ原では沼に水生植物（池に咲くオゼコウホネ、ルリイトトンボ、ナガバノモウセンゴケ、ミズゴケ等）が侵入し、浮島を作ったりして次第に陸地化していく。ヤマドリゼンマイの生えている沼の周辺には、シラカバが侵入している。上高地の梓川の氾濫原ではケショウヤナギが育っている。大雨等でできた崩壊地の河原にはカラマツが生え、森林が形成されていく。噴火の跡、山火事の跡も年月がたつと再び森になっていく。終極の森林も気温や土壌によって異なる。沖縄や奄美大島ではガジュマル、アコウ、宮崎県の志布志湾ではピロウの森が、本州内陸部では温帯落葉広葉樹のブナ林が、亜寒帯ではオオシラビソ、シラビソが、北海道にいくとトドマツ、エゾマツ、アカエゾマツの極相林が見られる。同じ変化が垂直分布でも見られる。北アルプスの中腹ではブナ、ミズナラが、亜高山帯ではオオシラビソ、コメツガが、さらに登るとダケカンバ等が見られる。高山帯になるとハイマツだが、ハイマツは雪の上に出ると寒さのために枯れてしまう。もとの根は枯れても枝から新しい根を下ろして伸びていく。



第2部「森の生物たち」

森林は樹木だけではなく、多くの動物との相互関係によって成り立っている。春になると、植物は雪の中から芽を出し、花を咲かせ、動物も活発に動きはじめる。太陽の光を浴びて、葉の中の葉緑体は光合成を行ない、形成層の分裂によって木は成長していく。森林の中では、オオカメノキ、ミネカエデ、シャクナゲ、ササ、岩の間のヒカリゴケ等、植物の住み分けが見られる。昆虫、リス、シカ等の植物を食べる動物、昆虫を食べるハンミョウやクモやトリも住む。天敵によって自然界は調節されている。森の中の種類が違うトリは、餌を取る場所、巣を作る場所が違っている。同じ種類のトリは縄張りを守っている。キツツキは丈夫なくちばしで木の中の虫を取り出す。自然への適応は見事である。ジムグリがメボソムシクイのヒナを狙う、トンボはカエルに食べられる、というように、そこには食物連鎖が見られる。モリアオガエルの産卵。たくさんのおタマジャ





クシも全部生き残ることはできない。ケモノは必要とする餌の量が多いので縄張りも広がる。ノネズミはフクロウに狙われる。森の食物連鎖の頂点に立つ猛禽のイヌワシやクマタカは生活圏が広く、少数で生活し孤独である。

落葉が積み腐食していく地表にも、たくさんの生物が生きている。落葉や枯れ枝を細かく砕いて土壌を作るヤスデやミミズ、森の掃除屋と呼ばれる菌類、動物の死体やフンを食べる生物もいる。地中にもたくさんの微生物が住んでいて、彼らによって有機物は分解され、無機物に還元されていく。土の中は巨大な分解・還元工場である。

森に秋が来ると、落葉広葉樹はいっせいに紅葉をはじめ、葉を落として冬の厳寒を越す。樹木の知恵ともいえる。風雪に耐えて自然の森が強く生きているのは、無数の生物たちに守られてきたからだ。森の生命は、生から死へ、死から生へと果てしなく循環していく。